常磐東小学校　校長だより

常なる磐

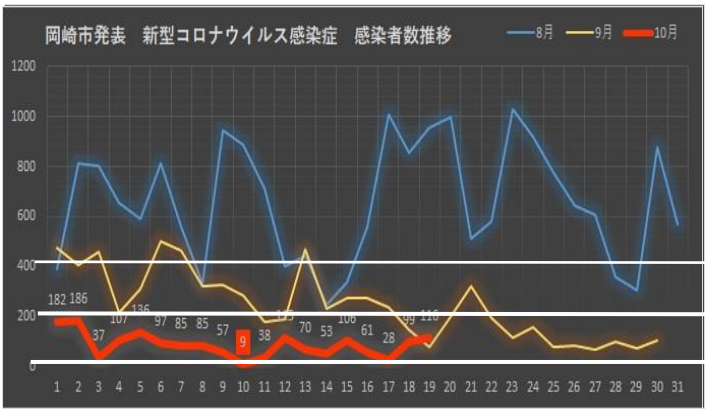
つねなる　いわ　seasonⅢ

令和　４年 10 月 21 日(金)

その２　通算 270 号

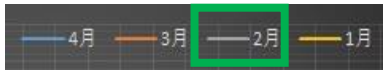
◇ 気を抜かずに…

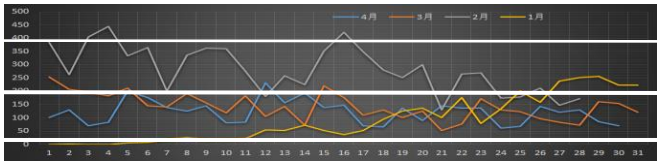
＜資料＞ 岡崎市の新型コロナウイルス感染者数推



8･9･10 月

R4.1～4月





◆左:第７波(８月) と 右:第６波(２月) の２つのグラフを並べたもの。
◆グラフ内の３本の白線は、下から【0】･【200】･【400】人のラインを表す。
◆グラフから、いかに第７波(８月)の感染者数が多かったかが分かる。
◆第６波(２月)は、先月の９月値と同等。
◆各月の平均値　１月≒92人　２月≒283人　３月≒143人　４月≒122人
８月≒661人　９月≒274人　10月≒80人ほど

◇10月は、９月と比べると数値が大きく下がったものの、３月･４月並みの数値で、１月前半の数値(1/1～1/15 の平均値:23.0 人)と比べると、まだまだ多い。

一時(いっとき)に比べ、ずいぶんと落ち着いてきた「岡崎市新型コロナウイルス感染状況」ではあるが、比べる対象が近況になるのが世の常。確かに第７波真っ盛りの８月平均感染者数が約 660 人に対して、今月は 80 人ほどで約 8 割強の減少。平均 270 人の９月と比べても約６割減だ。大幅減でよい傾向にあることは間違いない。ただし、前月比大幅ダウンの９月も、数値で見れは第６波と何ら変わりはない。

さらに、忘れかけている過去の経緯を振り返りたい。第６波ピークは２月だが、グラフを見て分かるように、前月の１月前半は０➡２➡０➡０➡５…というように一桁が続いた。ところが、１月中旬以降にその後激増する前兆が見られる。19 日に 100 人を超え、25 日には 200 人台へ。さらに 2/1 に 300 人を超えると、瞬く間に 400 オーバー。増えるのは本当に一瞬。最大の難敵は「気のゆるみ」だ。

さらに報道によると、今年の冬は「新型コロナウイルス」と「インフルエンザウイルス」の【ダブル感染拡大】が予見されるという。これは「コロナ第８波（ピークはR5.１月中旬）」の到来を意味している。専門家の予見から病院側も先を見越し、エリアを区切るなどして対応する準備を進めているとのことだ。生活する側も保健所や病院に任せきりにするのではなく、これまでの３年間に学んだ知識を生かしながら、各自が各立場で「やれること」を準備しておきたいものである。

さて、先に述べた【ダブル感染拡大】についてであるが、以前の「常なる磐」で、「ウイルスの特性から、複数のウイルス感染症が流行ることは稀である」といった真逆とも取れる情報について記載させてもらった。けれども、考え方によれば、何れの情報もガセネタということでもなかろう。実際のところ、例年ならば発出が必須であったインフルエンザ感染注意情報や警戒情報が、ここ２年、ほとんど聞かれなかった事実がある。本校もインフルエンザ感染は皆無であった。

ならば、なぜこの冬に【ダブル感染拡大】が予見されるのかという話になるが、専門家の菅谷慶応大客員教授が明確に回答を示してくれているので紹介したい。

◆2年続けてインフルエンザの流行がなかったため、子どもを中心に十分な免疫をもたない人が増えたため。
◆行動制限や水際対策の緩和により、人と人との接触が増えたため。
◆インフルエンザは季節感染型で冬季に流行する。よって、夏季の日本の裏側、つまり同時期に冬季である南半球の様子がインフルエンザの流行予測の目安。
その南半球のオーストラリアでは、9月中旬までに約22万人のインフルエンザ感染が報告され、昨年の598人から激増。（※369倍増）
前述の菅谷氏の見解：「オーストラリアではインフルエンザと新型コロナが同時に広がったことから、日本でも同じこと（※ダブル感染拡大）が起こりうる。」

菅谷氏の見解を私的にかみ砕いてみる。

「人がそこそこ備えるインフルエンザウイルス耐性に対し、ワクチン接種が行われるまで新型コロナウイルスの耐性は全くなかった。耐性０の状態で、しかも感染力の強い新型コロナウイルスにインフルエンザウイルスは押し切られた」

「新型コロナウイルスとインフルエンザウイルスの同時感染の可能性もあったが、新型コロナウイルス感染対策として日常生活で行っていた手指消毒や徹底したマスク装着、三密の回避等が、インフルエンザ感染予防に大変有効的であった」

そこで導かれた【W 感染回避法(予防法)】➡❶ワクチン接種　❷手指消毒・マスク装着・三密の回避　そして、**何度も学習してきた【❸気を抜かないこと】**だ。